

パネルディスカッション

「みんなで築く 人と環境に優しく魅力あるまちづくりを目指して」

国土交通省 都市・地域整備局 街路交通施設課 街路事業調整官 神田 昌幸
金沢工業大学教授 環境・建築学部建築系 建築都市デザイン学科担当 谷 明彦
金沢方式無電柱化ワークショップ ファシリテーター 上坂 達朗
金沢観光ボランティアガイド「まいどさん」 会長 喜多 益雄
コーディネーター（司会） 徳成奈津子



徳成

本日の ThinkOurStreet 推進委員会研修会、大変内容の濃いものとなっていますが、これからはパネルディスカッションを行いたいと思います。まずは、講演では日本と世界の様々な事例についてご紹介いただき、金沢とノッティンガムとの比較も大変興味深いものでしたが、神田調整官から見て、金沢のまちづくり、みちづくりのポイントや魅力はどのような点にあると思いますか。

神田

金沢は長い期間を使っているんなものを作り込んでいますが、「古いまちなみを大事にしましょう、開発すべき所は開発しましょう」という一つのコンセプトに従っていることが素晴らしい点だと思っています。このほかにも、環状道路でまちなかの通過交通を排除したり、ふらっとバスなど公共交通を積極的に支援するなど、初めて金沢を訪れた来街者が魅力的なまちだと言うことを聞くにつれ、これまでのまちづくりに大きな成果があるのだと思っています。

徳成

谷教授は、金沢のまちづくりについて研究を重ねられていますが、講演では、景観がまちづくりのキーワードの一つになるということでしたね。

谷

景観という言葉は長い歴史がありますが、1980～90年代に一度景観ブームがあり、景気の良い時代でしたので、表面的に景観を美しくする手法が盛んに行われていました。

それは本当の景観ではないと思っています。例えば言えば、女性本来の美しさを厚い化粧で隠してしまう様なもので、まちが本来持っている魅力、健全さが現れてくるのが景観であると考えています。

徳成

景観をより良くするというので、金沢では無電柱化が進められていますが、ワークショップファシリテーター（調整役）の上坂さんに、ワークショップでの住民の声を聞いてみたいと思います。

上坂

6地区で行っているワークショップについては、どの地区の住民も景観に対して認識が高く、是非とも無電柱化をしてほしいとの意見をよく耳にします。難しい点は多々ありますが、ワークショップはやりがいのある仕事だと感じていますし、住民の意識が大事だと思っています。



徳成

住民の意識ですが、みなさんは金沢のまちに対し、誇りを感じているということでしょうか。

上坂

今回の地区は金沢を代表する観光地域が多く、自負されている住民が多いと感じました。

徳成

ワークショップの中で、課題もあるが協力的であると言うことは、やはり市民の立場から魅力的なまちになってほしいとの思いが強いということでしょうね。

観光都市としての一面を持ち合わせる金沢にあって、金沢観光ボランティアガイドとして活動している「まいどさん」会長の喜多さんに、魅力あるまちづくりについて、観光客から見て金沢はどのように映っているのか、お聞きします。

喜多

造詣のある方々からも、綺麗なまち、風情のあるまちと言われ、大変感謝しています。

徳成

金沢の良さを観光客も感じているのでしょうか。

喜多

むしろ、金沢の良さを観光客から教えられることの方が多いです。



徳成

その反対に、金沢はこうあったらいいという話を観光客から聞いたり、自分で感じていることはありますか。

喜多

観光客からは、狭い道を広げたり家を綺麗にするよりは、今のままの方が風情があるし、まちの息づかいが見え聞こえるとの意見があります。無理にまちを直していく必要がないのではないかと教えられることもあります。

徳成

道を広げず便利さを求めなくてもいいということでしょうか。

喜多

金沢の旧市街地には、町家住まいされている高齢の方が多く、長年そのまちの風情に慣れ親しんでいるので、開発によって心の支えが無くなるということも聞かされています。町家は一見不便さを感じますが、日常的に体が鍛えられ怪我もしませんし、むしろ高齢の方に優しい住宅といえます。

徳成

今の観光客や市民の話を聞いて、神田調整官はどのように感じたでしょうか。

神田

そのとおりだと思います。まずは、たくさんの車がまちに溢れない仕組みづくりが大切です。物流面や便利さ、車を必要する方々の立場から見れば、車の役割は理解できますが、まちの良さや風情を残しながら道を整備する手立ても考えないといけないと思っています。金沢のあり方を考える時に、環状道路の整備もその一つであると考えます。通過交通の市内流入を排除するために、郊外部に道路網の骨格を作り、歴史のあるまちなかで拡幅が困難なところは、区画整理手法を使ったり都市計画決定の見直しを行うなど、都市計画道路のあり方、まちのあり方、景観整備など総合的に考えていくことが大切だと思います。

徳成

神田調整官の講演では、整備の一方で意識改革も必要であるとの話がありましたが、金沢で行っているワークショップについて、どのように感じましたか。

神田

景観法を作成した時期に、自らが関わったワークショップの経験から言えば、住民がどのような意識を持っているのかを把握でき、住民側も自分達のまちを改めて認識するきっかけ作りになるもので、また、発言し行動することにより住民の意識レベルが上がり、それに応じて景観計画を作り込んでいけるので、その過程となるワークショップは重要であるし、住民の意識改革が図られるうえでも良い取り組みだと感じています。

徳成

ワークショップの調整役として、上坂さんは住民の変化をどのように受け止められましたか。

上坂

後ろ向きな意見を述べられる方もいましたが、その声をしっかりと聞き受け止め、回数を重ねる度に、前向きな意見を述べたり、周りの方も真剣に考えるべきだと変化していく姿を感じ取りました。聞くこと、一緒に考えることが大切だと思います。

徳成

ワークショップをまとめる谷教授は、住民の変化をどのように感じましたか。

谷

無電柱化は、典型的な総論賛成、各論反対の事例です。地上機器の置き場一つでも問題が発生しますので、みんなで話し合い解決できるのがワークショップだと思います。

徳成

みんなで話し合い行動することで、住民自身が当事者になるということですね。

谷

自分が少し譲歩すれば、みんなが幸せになるという気持ちになっていくということです。

徳成

心に変化が現れてくるということですが、喜多さんに、金沢のまちなみの変化で感じていることを聞かせてください。

喜多

電柱のないところを案内していると、綺麗な通り、綺麗なまちですねとの返事が返ってきます。無電柱化工事を行ったことを説明し、初めて気づく方が多いようです。無電柱化自体がまちにとけ込まれたということでしょうが、裏通りの配線の多さとの対比し、表通りが綺麗だと感じている方がいるのだと思っています。

徳成

何気なくみなさんが綺麗だなと感じるところが大切なのでしょうかね。

無電柱化について、さらに興味深い意見を聞いています。電柱はあった方がいいと言う方もいるようです。

その理由は様々ですが、ひとつにはレトロな雰囲気、生活感が息づくまちなみを感じられるからとのこと。このような意見を神田調整官は聞いたことがありますか。



神田

倉敷市の助役であった時のひとですが、美観地区の裏通りで無電柱化の話があり、地元の有力者で電柱が好きという方がいました。電柱と電線を混同していませんかとお話しし、電柱の良さについてお互い理解を深めました。その良い事例が大分の湯布院でして、電柱と裸電球を使って大正時代の雰囲気を出しています。しかし現代ではICT技術の普及により光ケーブルが増え、電柱への負荷が大きくなっています。クモの巣のような電線は良い景観にならないと思っています。



徳成

電柱でもいろいろな捉え方があることを教えてもらいましたが、電柱をなくすことについて、谷教授にお聞きします。

谷

無電柱化すると、商売に支障を来すとか、道幅が広くなり通過車両の速度が上がって怖いなどの意見を聞く一方で、電柱と電線があると鳥が止まり糞を落とすから早く無電柱化してほしいという景観に全く関係のない話もたくさん聞きます。いろいろな意見があって然るべきで、議論していくうちに、無電柱化は必要だとの方向に収まってきています。ここまでが総論賛成であって、次に各論に入ると反対意見も出て難しくなっているのが実状です。



徳成

みんなで議論することで初めて道筋が見えてくるということが成果ですね。

谷

今は無電柱化で実施していますが、「みんなで話し合うことはまちづくりの基本」だということです。この経験をした町会は、次の困難事例でも比較的早いうちに結論を導き出すことができます。震災の時、まちづくりを行っていた町会是对応が早かったと聞きました。

徳成

ワークショップが至るところで活かされるということですね。

金沢に住まいする喜多さんは、金沢のまちなみの魅力と、今回のテーマの魅力あるまちづくりについて、どのように感じ、考えていますか。

喜多

金沢のまちなみは「全国に希少なもの、風情があり、まちに人格を感じる」とも聞きました。金沢へ定期的に訪れる方に教えられましたが、景観は整備だけではなくて、生活している住民に

よって作られる要素も多分にあるということです。

まちが綺麗であるのは、家の前の日常的な清掃や水まきが行われているからでもあり、その話しを観光客にすると驚き、市で行わないのは何故ですかと聞き返す方もいます。金沢のたたずまいに人格を感じる、例えば家の前の植木や庭木の手入れが素晴らしいことなど、まち全体に素晴らしい人格が感じられ、情緒があると教えられました。

徳成

同じく金沢に住まいする上坂さんは、魅力あるまちづくりについてどのように考えていますか。

上坂

美しい景観づくりをしても、そのまちを歩く人がいなければ意味がないと思っています。金沢市では歩けるまちづくり協定という制度がありまして、商店街や茶屋街のほか、最近では、一般の住宅地でも協定締結を行っています。このことは大変画期的なことだと思っていて、環状道路の完成によりまちなかの交通量が減り車の進入を規制するために拡充されました。ようやく安心して暮らせる環境が整ってきたということです。この協定を結んだ時の話しで、ワークショップでも同じことが言えますが、同じ町会で普段面識のない方と会話をする機会が増え、地域のコミュニケーションを作る場にもなったということです。このような機会をもっと増やしていくべきだと思っています。

徳成

ワークショップは様々な効果があるほか、地域コミュニケーションの形成という副産物も生み出しているということですね。

歩けるまちづくりは、金沢のまちづくりの重要な要素であることを理解しましたが、さらに歩けるまちづくりを進めるうえで大事な点は何でしょうか。

谷

昔、まちは美しかったが、今は美しくないという方がいますが、その理由の一つは、車のスピードで人が動くため細かなものが見えなくなり、気に懸けなくなったからです。誰も見ないまちは美しくしようというインセンティブが働かないということです。女性は見られることでもっと美しくなることと一緒に、歩くスピードで見てもらわないと、まちの良さはわからないということです。住んでいるまちの人も美しくしようという意識が出てきます。もう一つは官民境界の制限線を設けたために、例えば自宅前の路上の雪かきさえしなくなり、ゴミが落ちていても市が拾ってくれるだろうという無意識の感情が発生し、そのことがまちを良くできない原因であると思っています。さらに世間を気にする意識が薄れていることも要因に挙げられますが、金沢の人は、美に対する意識がある程度出来ているということでしょうね。

神田

伝統工芸や文化活動が盛んで歴史的環境が身近にあることで、金沢市民の美意識は高いと思います。

徳成

金沢人の美意識がまちづくりの面でも重要視されていますが、時代の流れの中で少しずつ個人差が出てきているのが現状です。上坂さんはワークショップの中でうまくコントロールされていると思いますが、どうですか。

上坂

地上機器の模型を実際に現地に置いて意見を聞くデザインゲーム的なものや、たたき台を提示し意見交換を行うことで、住民の合意形成を図っています。自分自身のこととして熱心に意見交換が行われていますし、景観に対する意識が高いことも感じました。

徳成

金沢人の伝統に息づく美意識が、金沢の景観、まちなみ、みちづくりを、さらに推し進めていく原動力になっているのかもしれない。

最後に、この会のまとめを神田調整官をお願いします。



神田

ワークショップを通じて、色々な良い副産物が出来ていると改めて感じました。成果物としての合意形成による無電柱化の実現はもちろんですが、ワークショップによって人と人の繋がりができ、まちに対する愛着も生まれ、人間の輪ができるということが素晴らしい。金沢らしいのは、景観整備を文化的な側面をもった活動を通して合意形成が図られているということで、これこそが金沢方式だと思いました。

徳成

今回のパネルディスカッションが皆様のまちづくりのヒントに少しでもなれば、大変ありがたいことだと思っています。ありがとうございました。

平成 21 年 11 月 12 日（木） ホテル日航金沢にて